

2019年6月5日(水)

「北海道とアイヌ民族 もう一つの150年」が 第56回ギャラクシー賞 報道活動部門選奨を受賞

HTB北海道テレビ(HTB)が取り組んでいる、日本の先住民族アイヌの差別の歴史をひもとき、権利回復を訴える活動「北海道とアイヌ民族 もう一つの150年」が、第56回ギャラクシー賞*の報道活動部門選奨を受賞しました。HTBがギャラクシー賞報道活動部門で受賞するのは、今回で9回目となり、昨年度の第55回ギャラクシー賞でHTBと阿部幹雄氏(写真家・ビデオジャーリスト)の長年に渡る活動「ヒグマの生態と、人間との『距離』の問題を伝え続ける」が報道活動部門奨励賞を受賞したのに続く快挙となります。

「北海道とアイヌ民族 もう一つの150年」は、2017年7月から夕方の情報番組『イチオシ!!』のニュース特集で、アイヌ遺骨返還問題を取り上げたことを皮切りに、海外取材も交えて歴史的な背景を深掘りすると共に、返還訴訟を追い、またアイヌ民族独特の死生観を伝えるなど多角的な放送活動を行いました。番組では、テレメンタリー2018『嘘塗りの骨～アイヌ人骨返還問題の悲痛～』(2018年2月17日)を制作・全国放送したほか、60分枠に拡大したドキュメンタリー、HTBノンフィクション『聞こえない声～アイヌ人骨問題 もう一つの150年』(2018年4月23日 北海道ローカル放送)を制作、同番組の英語字幕版はポーランド、カナダ、スウェーデンの映像祭で上映されています。

選評の中で、「明治維新から150年の節目に、北の大地から別の視点で日本の近代、開拓の歴史を捉えなおす意欲的なシリーズだった。アイヌ遺骨返還訴訟、アイヌ新法制定、国立アイヌ民族博物館など現在進行形の問題を取り上げ、アイヌの権利の回復を訴えた」と高い評価を受けました。

一連の報道活動の担当デスク・プロデューサーの沼田博光は、「アイヌの皆さんは40年以上前から遺骨の返還を訴えていましたが、国や大学は長い間、解決に向けて動くことはありませんでした。この問題にきちんと向き合っていかなかったのは、私たちHTBも同じです。もっと早く伝えるべき大きな問題であり、一連の報道はその反省を込めたものでした。今回の受賞で、アイヌ民族が被った過去の侵略や様々な差別問題について全国の人に知っていただく機会となりました。今後も取材を続けていかなければならないと受け止めています」と話しています。

HTBは、地域メディアとして、これからも日本の先住民族であるアイヌについて継続的な取材、番組制作、情報発信を続けてまいります。

*ギャラクシー賞は放送批評懇談会が日本の放送文化の質的な向上を願い、優秀番組・個人・団体を顕彰するために1963年に創設した日本を代表する番組コンクール。テレビ、ラジオ、CM、報道活動の4部門からなり、このうち報道活動部門は個々の番組枠を超えたキャンペーンや息の長い調査報道、地域に密着した長期シリーズ、スクープ的な報道などを対象にして2002年に新設されたもの。